

---



---

## モノの流通と消費にみる モンゴル遊牧民の生存戦略

堀田 あゆみ

(国立民族学博物館)

### I はじめに

本稿では移行期<sup>1)</sup>を経た現代のモンゴル国において遊牧を営む人々が、どのように市場に接合しながらモノを消費しているのかを、日常生活におけるモノの流れから明らかにする。

モンゴル国は1921年に社会主義政権が誕生して以降、ソ連に次ぐ世界で二番目の社会主義国家として約70年間計画経済を進めてきた。ソ連型社会主義体制下の遊牧地域では、1950年代後半から1990年代初頭まで「ネグデル」(*negdel*)と呼ばれる協同組合が全国各郡に組織されていた。遊牧民は組合員となり、家畜や畜舎はネグデルの共有財産とされた〔風戸 2009 : 7〕。国はネグデルを通して、遊牧民が生産した肉や羊毛などの畜産品の回収、輸送、販売を統轄すると同時に、遊牧民に給料を支払い、生活用品の流通も担っていた〔ロッサビ 2007 (2005) : 150〕。ネグデルが設立されたのを機に、ポリタンク、トランプ、絨毯、かまどといった工業製品がソ連を中心とするコメコン<sup>2)</sup>経済圏から流入するようになり〔辛嶋 2010 : 192〕、遊牧生活における物質文化の第一の転換期を迎えた。

---

<sup>1)</sup> ソ連型の社会主義体制の崩壊から市場経済・民主化への移行期をさして、ポスト社会主義期という。「ポスト社会主義」は、「人類の壮大な歴史的実験であったソ連の社会主義体制の評価と、社会主義体制崩壊後の旧社会主義国家の行方」〔佐々木 1998 : 6〕を対象とする、1991年のソ連の崩壊後に旧社会主義国家で起きた社会変容や、変化への対応として現れた現象を通文化的に研究するための概念である。

<sup>2)</sup> COMECON (経済相互援助会議)。

一党独裁を放棄し、民主化、市場経済化へと舵を切った1990年以降、輸入の8割を占めていた独立国家共同体（CIS）からの物流が途絶え、都市部では燃料、原料、交換部品の品切れのために工場は閉鎖を余儀なくされ、失業が深刻な問題となった〔ロッサビ2007（2005）：69〕。砂糖やバターなど主要な食品が入手できなくなり、肉、米、マッチなどの必需品は配給制となった。遊牧地域では、肉や乳製品はあっても、小麦粉、砂糖、アメなどが手に入らなかったほか〔ロッサビ2007（2005）：70〕、衣類、茶、煙草、紙、電池、陶器類、歯磨き粉などが不足した〔三秋1995：61〕。耐用年数を過ぎたコメコンの工業製品が、安価な中国製品へと置きかわっていき、モンゴル国がグローバルな資本主義経済に接合されていった〔辛嶋2010：193〕1990年代前半が物質文化第二の転換期といえる。

第二の転換期から20年以上が経過した現在の遊牧地域には、携帯電話、ソーラーパネル、パラボラ・アンテナなどかつてなかったモノが次々と流入している。中国製品だけでなく、韓国や欧米製の新品・中古品が流通するようになり、消費者の選択の幅を広げている。安価で軽いプラスチック製品が木製や革製の台所用品に取って代わり、韓国製の中古トラックの普及にともなって、これまで季節移動の際に用いられてきた荷車が姿を消しつつある。家畜の放牧や家族揃っての外出に中国製のオートバイが利用されるようになると、相対的にウマが乗用される機会が少なくなった。このように、新たなモノの普及は遊牧民の物質文化だけでなく、生活にも変化を起こしている。

1991年にネグデルが解体されたあと、民営化により遊牧民は完全な自営となり、国は家畜の購入を保証せず、生産物を市場へ輸送することともなくなった〔ロッサビ2007（2005）：156〕。それゆえ、遊牧民世帯が畜産品や収穫物の販売によって現金収入を得、小麦粉・砂糖・茶などの食料品、生活用品を購入するためには、市場への直接的な接合が不可欠になった。市場から遠く、インフラの整備されていない地域の遊牧民ほど条件が悪くなり、自ら市場にアクセスする手段をもたない場合や相場の変動に疎い人々は、行商の言い値で買ったたかれることもあった。市

場へのアクセスを求めて、遊牧民が都市部や定住地域、幹線道路の近く  
に宿営するようになった結果、家畜の過密による草地の荒廃が進むとい  
う問題も生じている [森他 2002; ロッサビ 2007 (2005)]。

このような市場への接近を生存戦略として採用する人々がいる一方、  
本稿で扱う遊牧地域の人々は都市部に近接するのではなく、祖父母の代  
から遊牧を続けてきた地元に留まりながら生計を立てている。前者を市  
場志向型と位置付けるならば、後者は遊牧志向型といえよう。市場を介  
してグローバル経済の一端へ接合することになった遊牧志向型遊牧民の  
生存戦略を、日常生活におけるモノの入手や消費の実態を通して明らか  
にしたい。

## II 遊牧民世帯の生計

本節では調査地域の概要を述べたうえで、調査世帯 E 家の事例を参  
考にしながら主だった収入源と支出用途について述べ、家計を維持する  
ためにどのような経済活動が行われているのかを概観する。

アルハンガイ県 (*Arkhangai aimag*) はモンゴル国中西部の森林ステッ  
プ地帯に位置する比較的降水量が多く緑豊かな地域である。2009 年の  
データによると人口 9 万 2,500 人の内、ほぼ 20% が都市部 (定住地)  
で、80% は草原で生活している。家畜頭数はウマ、ウシ、ヒツジ、ヤ  
ギ、ラクダを合わせて 361 万 9,100 頭であり、ウマ、ウシ、ヒツジの保  
有頭数では全国第一位を占めている。農牧業が県の GDP に占める割合  
が 77.7% と全国で最も高い、モンゴル国有数の遊牧地域である<sup>3)</sup>。

アルハンガイ県の中心地はエルデネボルガン郡 (*Erdenebulgan sum*) の  
ツェツェルレグ市 (*Tsetserleg khot*) にあり、約 1 万 7,000 人が暮らす。こ  
のツェツェルレグ市から南東へ 91 km の位置にホトント郡 (*Khotont sum*)

<sup>3)</sup> 2009 年度におけるアルハンガイ県の GDP は 1,427 億 3,730 万トゥグルクで、  
モンゴル国の GDP 6 兆 5,906 億 3,710 万トゥグルクから首都ウランバートルの  
GDP を差し引いた 2 兆 6,767 億 3,460 万トゥグルクの 5% を占め、首都ウラン  
バートルを除く全 21 県中第 5 位であった [National Statistical Office of Mongolia  
2011]。

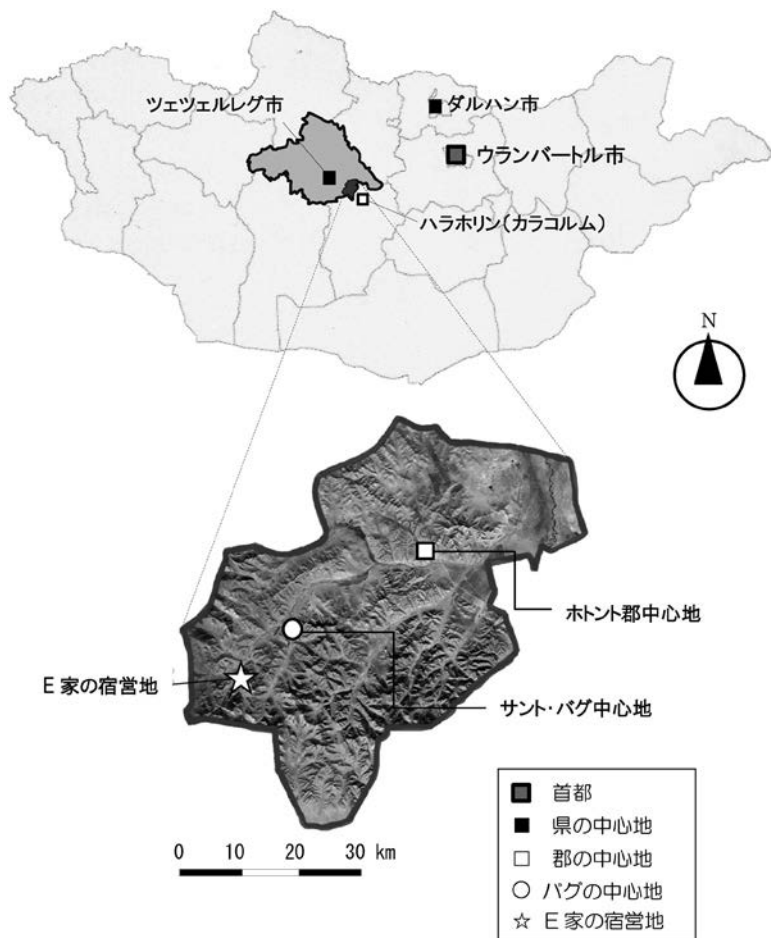


図1 アルハンガイ県ホントント郡サント・バグにおけるE家の宿营地  
出典: ХАНГАЙНХАН КЛУБ 2003: 367 より作成

の中心地がある。ホントント郡には、17万5,502頭の家畜がおり、4,874人が暮らしている〔2006年時点〕〔Baatarbileg 他 2009〕。郡の中心地には、役所、銀行、小中学校、ガソリンスタンド、携帯電話会社2社の受信アンテナ、商店などが設けられており、定住区も広がっている。ホントント郡はさらにバグ（bag）と呼ばれる六つの下位行政単位に分けられ

る。ホトント郡の中心地から南西に約 30 km 進むとサント (Sant)・バグの中心地が見えてくる。9 年制学校や商店があり定住する人々の家屋もある。サント・バグにはおよそ 300 世帯が暮らしている〔2011 年時点〕。バグの中心地から、さらに道なき道を南西に 12 km ほど進むと、E 家が暮らす地域に到着する (図 1)。ツァガーン・スミーン川 (Tsagaan sūmiin gol) とその支流に広がる平野部で E 家を含む 22 世帯が遊牧生活を営んでいる。

E 家の家長は、E で 1977 年生まれ、妻の M は 1978 年生まれである。サント地域で遊牧民の家庭に生まれ育った二人は 2000 年に結婚し、Z (2002 年生まれ) と U (2004 年生まれ) 二人の息子がいる。ウマ、ウシ (ヤクおよびハイナク<sup>4)</sup>を含む)、ヒツジ、ヤギを合わせ約 200 頭の家畜を放牧している。アルハンガイ県の保有家畜頭数を県内の遊牧民世帯総数 (1 万 5,858 世帯、2008 年) で割ると、平均して一世帯当たり 213 頭の家畜を有している計算になる。従って E 家は県内で標準的な遊牧民世帯であるといえる。

E と M の両親は双方とも他界しているため、兄弟世帯との交流が盛んである (図 2)。E は 8 人兄弟の末っ子である。5 人いる兄のうち、上から二番目と四番目の兄 H 世帯はウランバートル市 (Ulaanbaatar khot : 以後 UB と表記する) に、一番上と三番目の兄世帯はツェツェルレグ市に住んでおり、すぐ上の兄 B 世帯が同じくサント地域で遊牧をしている。二人の姉のうち D はツェツェルレグ市に住んでおり、もう一人の姉は同じくサントで遊牧していたが 2007 年に他界した。その亡姉の夫 F と長男世帯の A 家、長女 I 家はサントで遊牧しており、未婚の次男 N は UB の建設現場へ出稼ぎにいつている。

一方、妻 M も 6 人兄弟の末っ子である。4 人いる兄のうち、K 家はツェツェルレグ市に、W 家はハラホリン (Kharkhorin : ウヴルハンガイ県北部にあるソム中心地) に住み、あとの L 家と C 家はサントで遊牧をしている。姉世帯の R 家もサントの中心地の側で遊牧をしている。

<sup>4)</sup> ハイナク (khainag) はヤクとウシの混血種。

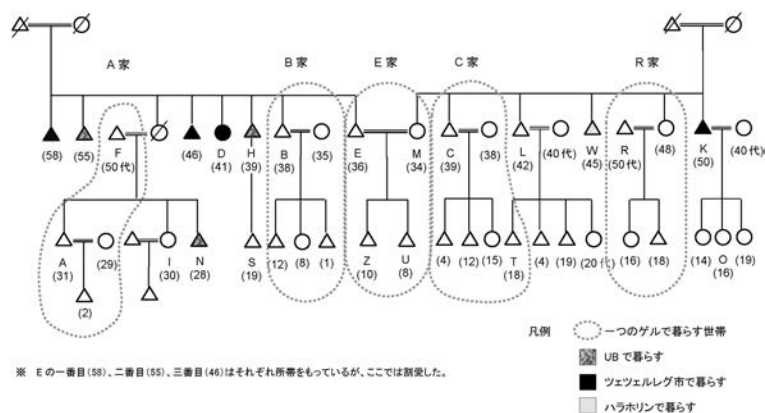


図2 E家の親族関係図(2012年)

ツェツェルレグ市に住む兄世帯とも、夏休みや通学の折りに子どもを預け合ったり、年に数回お互いを訪ねあうなどして交流をもっている。

Eは結婚以前の1998年ごろ、一時期兄の子ども達の世話をするためにUBで暮らしていたことがあり、教育や物流面における都市生活のメリットを熟知している。と同時に、現金収入がなければ食事にさえありつけないというリスクも理解しており、遊牧で生活できるのならその方がよいと考えている。Mも結婚前にダルハン市(Darkhan-uul khot: モンゴル第三の工業都市)の絨毯製造工場で働いた経験があるが、都市部の生活は自分にはあわず、UBは怖くて行くのも嫌だという。

遊牧民が現金収入を得る手段には、畜産物の販売のほかに、定期的に支給される子ども手当や年金の受給、観光客の受入や収獲物の販売による季節収入などがある。

一年で最も多くの現金収入をもたらすと期待されているのが、カシミヤの販売である。春に梳いて集めたカシミヤは、その年によって変動するが1kgあたり5万4,000トゥグルク(*tögrög*<sup>5)</sup>: 以後₮と表記)で業者に買い取られる。2010年の5月にE家では50頭のヤギからとれたカ

<sup>5)</sup> モンゴル国の通貨。1円=15.85₮〔2010年9月時点〕。

シミヤで 80 万 ₮ (約 5 万円) を得た<sup>6)</sup>。

カシミヤに限らず、羊毛や毛皮の買い付け額も時期によって大きく変動する。調査期間を通じて羊毛は 1 kg あたり 200～500 ₮ の値で取引された。ヤギの毛皮は最も安くて 1 枚 500 ₮、高い時には 1 万 ₮ を超えることもあった。ヒツジの毛皮は 1 枚 300～2,000 ₮ の間で推移していた。そのため、遊牧民は常に出先で情報を集め時価の動向を注視している。刈り取った毛や毛皮は一時的に蓄えておかれ、現金の必要が生じた時や、買い取り業者が来た時、価格が上昇するのを待って売却される。

生きた家畜の販売もまとまった収入をもたらす。E 家では、自家消費が中心であり、ウマ以外で生きた家畜が売却されることはほとんどなかったが、目安として聞き取った額によると、雄ウシが 50 万～130 万 ₮、雌ウシが 20 万～70 万 ₮、ウマは 25 万～70 万 ₮ である。E 家では 2009 年の 8 月に 61 万 ₮ で種ウマを売却した。大型のヤギや雄ヤギは 8 万 ₮、小型のヤギや雌ヤギおよび仔ヤギは 2 万～6 万 ₮、子持ちのヤギは 4 万 5,000 ₮ である。そして、雄ヒツジが 8 万 ₮、雌ヒツジが 6 万 ₮ ということであった。

搾乳が行われる夏季には、乳を加工してタラグ (*tarag*: ヨーグルト)、ウルム (*öröm*: クリーム)、アールツ (*aarts*: 高発酵半乾性チーズ)、エーズギー (*eezgii*: 低発酵凝固チーズ)、アーロール (*aaruul*: 高発酵乾性チーズ)、アイラグ (*airag*: 馬乳酒) などが作られる。大量に作った乳製品から自家で消費する分を残し、余剰分を販売している。販売は世帯ごとに行うのではなく、トラックをもつ世帯か車を調達できた人が地域の各世帯を回って乳やアイラグなどを買い取り、都市部へ運んで販売し利鞘を稼いでいる。

<sup>6)</sup> この年ヤギが 50 頭しかいなかった理由は、2009 年暮れから 2010 年春にかけて気温の低下による家畜の大量死ゾド (*zud*) が発生したことによる。モンゴル全土で 840 万頭の家畜が死んだ。E 家もサントの他の世帯同様に被害を受け、17 頭いたウマが 6 頭に、96 頭のヤギが 40 頭に (その後 10 頭を購入)、70 頭のヒツジが 12 頭に、4 頭いたウシ (ヤク・ハイナク含む) は 0 頭になった。もし、ゾドに見舞われず順調に家畜が増え 150 頭のヤギがいれば 250 万 ₮ (約 15 万 8,000 円) が得られるはずであったという。

表1 乳製品価格

〔2008年冬季〕

乳製品	価格
乳(冷凍)/ペットボトル1本	800～1,000
ウルム/1枚(一鍋に張った分)	2,500
アールツ/l	1,000
ヨーグルト(冷凍)/kg	1,500
アーロール/kg	1,500
エーズギー/kg	1,500

単位トッグルク [1円=10.80₮]

乳製品の価格は、乳の採れなくなる冬に上がるため、夏にこしらえたものを保存しておき、11月末から12月の頭頃にUBへ売りに行く。表1は2009年に聞き取った前年の小売業者への卸価格である。サントからUBまでは約450kmであり、天候と路面の状態にもよるが自動車で8～10時間とアクセス条件として悪い方ではなかった。しかし、ここ数年で自家用車をもつ遊牧民世帯が増加し、それぞれがUBの市場へアクセスするようになったため、もはや長距離輸送してまで販売するメリットはなくなったという。

月に一度、遊牧民がおめかしをしてホトントの中心地へ出かけていく日がある。子ども手当を受け取るためである。政府から毎月子ども一人当たり3,000₮<sup>7)</sup>が、18歳以下の子どものいる家庭に支給されている。各世帯には、人間開発基金<sup>8)</sup>と書かれた手帳が人数配布されており、それを持って銀行に行くとお金を受け取れる。

もう一つの定期的な現金収入に年金がある。男性は60歳、女性は55歳から受給できる。受給資格は20年以上働いていることであり、働いた年数によって受給額は異なるが、国の家畜を預かっていた場合には多くもらえ、個人の家畜を放牧していた場合は安いという。最低でも月に

<sup>7)</sup> 2012年以降は、子ども一人当たり約2万₮が毎月支給されている。

<sup>8)</sup> 人間開発基金 (*khünii khögjil san*) は、地下資源収入を全国民へ平等に還元することを目的とした政策により誕生した。国民一人当たり150万₮を現金や株式などで支給する [津江2013]。



8 万 ₮ が給付される。これらの定期収入は、遊牧民にとって確実に手に入る現金収入として家計の重要な位置を占めている。

森林資源の豊富なハンガイ地域において、サマル (*samar*) の採取・販売も非常に重要な季節収入源になっている。サマルというのは、クルミやクリのような硬い殻に覆われたホシ<sup>9)</sup> の木の実のことであり、炒った後に歯で殻を割り、中の実だけを食べる嗜好品である。採取はホシの木をゆすって枝についているサマルを落とし拾い集めるという方法で行う。業者の買い取り価格は近年上昇し 1 kg あたり 2,300 ₮ である〔2012 年時点〕<sup>10)</sup>。E 家もバイクで山に何度か入り朝から晩まで拾い集め、2012 年は 400 万 ₮ 以上を稼いだという。

これらの方法で得た現金の主な支出用途は食料品、衣料品、日用雑貨の購入や、交通・通信費などである。サントの遊牧民が食料品、衣料品、日用雑貨を購入するのは、バグや郡の中心地にある商店、およびツェツェルレグ、ハラホリン、UB の市場などである。夏季には月に二、三回ほどの頻度でやって来るナイマー (*naimaa*) と呼ばれる行商も利用する。具体的な支出の内容と物価の事例を以下にあげる。

サントには、観光客を対象とした季節営業の宿泊施設（複数のゲル、トイレ、シャワー、商店などを備えている）がいくつか存在する。E 家の夏営地から 5～6 km のところにある宿泊施設には電気が通っており、商店や診療所が併設されていることから地元の遊牧民もよく利用している。この商店では、アメ、ジュース、茶菓子などの食料品や子ども服、靴、パンツ、石鹸、および仏具が売られている。M がロウソクを買いに訪れた時、ビスケット (350 ₮) と金たわし (500 ₮) を購入したもののロウソクがなかったため、宿泊施設の側にある丘の上の商店へ足をのばした。商品棚には衛生用品という表示があり、石鹸、粉末洗剤、下着 (パンツ)、軍手、生理用品、セロハンテープ、歯磨き粉、トイレットペーパー、御香などが置かれていた。UB では 700 ₮ のジュースが 900 ₮ で売られており、全体的に 200～300 ₮ ほど高い値がつけられていた

<sup>9)</sup> ホシ (*khush*) はシベリア松 (*Pinus sibirica*)。

<sup>10)</sup> 2016 年現在は、1 kg 当たり 7,000 ₮ に上昇。

〔2009 年 8 月当時〕。しかし、この店にもロウソクはなく、結局その日は手に入らなかった。翌日、E 家と共営していた G 家が折よくバグの中心地へ出かけるというので、M はロウソクを頼んだ。

ツェツェルレグ市には、大きな市場や中古衣類専門店、家具、絹布、小物、洋服などを扱う各種商店が立ち並び、警察署、インターネットカフェなどもある。サントの中心地から約 75 km、夏場ならばジープで片道 3 時間ほどのところにある。家畜の世話を人に任せていかねばならないため、頻繁に行き来することはないが、ツェツェルレグ市の学校に通わせている子どもの学期ごとの送迎や、親戚訪問のために年に数回訪れている。

2009 年 8 月 31 日、M は夏休みをサントの自宅で過ごした長男（7 歳）を 9 月の新学期にあわせて送り届けるために、次男（5 歳）を連れ、知人の車に同乗して出発した。E は家畜の世話をするために残った。ツェツェルレグ市に到着すると、早速子ども達を連れて市場へ向かい、翌日の始業式に備えて学用品一式を揃えた。制服用のズボン、カッターシャツ、革靴、スニーカー、古着の長袖シャツ、リュックサック、ハサミ、ノートカバー（10 枚）、ボールペン（2 本）、ボールペン用替え芯（10 本）、鉛筆削りなどを次々と購入ししめて 4 万 6,800 円の買い物であった（表 2）。

M は翌日も市場へ出かけ、小麦粉 25 kg、米 5 kg、茶葉 5 kg、砂糖 3 kg、塩 500 g、チョコ各種 500 g、揚げパンなどの食料品や、トイレットペーパー、歯磨き粉、洗濯用石鹼（10 個）、粉末洗剤 800 g などの消耗品を購入した。25 kg の小麦粉を親戚の家まで運んでもらうために 1,000 円支払った他、商店で板チョコ（1,050 円）、アイス（650～700 円）、ジュース（700 円）などを子ども達に買い与えた。この日 M が食料品と日用雑貨の購入に費やしたのはおよそ 5 万円であった。

ツェツェルレグ市の物価はほぼ UB と変わらず、サントよりも安いため、まとまった買い物をする際には重用される。新学期に合わせた今回のツェツェルレグ市訪問の出費は、交通費を含めると 10 万円を超えた。

ナイマーというのは本来「商売、貿易、取引」という意味であるが、サントでは車に商品を乗せてやって来る行商や家畜・畜産品の買い付け

表2 ツェツェルレグの市場価格

〔2009年8月〕

市場の商品	価格
子ども用ズボン	8,000
子ども用カッターシャツ	6,000
革靴	12,000
スニーカー	10,000
長袖シャツ（古着）	2,000
リュックサック	6,000
ハサミ	300
ノートカバー	30
ボールペン	200
ボールペン用替え芯	150
鉛筆削り	300
小麦粉 25 kg	16,000
米 5 kg	6,500
茶葉 5 kg	3,500
砂糖 3 kg	4,500
塩 500 g	200
チョコ各種 500 g	2,500
揚げパン	1,200～2,200
トイレトペーパー	450
歯磨き粉	1,100
洗濯用石鹸	400
粉末洗剤 800 g	3,000

表3 ナイマーの商品価格

〔2009年8月〕

ナイマーの商品	価格
女性用ズボン	3,000
女性用ジーンズ	13,000
女性用下着（パンツ）	1,500
男性用ジャージ	9,000
子ども用カッターシャツ	5,000
スニーカー	15,000
バスケット・シューズ	20,000
エナメル靴	14,000
合皮リュックサック	9,000
ノート（12 頁）	200
ノート（24 頁）	400
ノート（60 頁）	500
ノート（96 頁）	800
水性ボールペン	200
ボールペン用替え芯	150
クッキー	800
ウエハウス	400
小麦菓子	1,200
マッチ（10 箱）	400

単位 トウグルク [1 円 = 14.85₮]

にやって来る人々を総称してナイマーと呼んでいる。月に二回ほどアルハンガイや UB から不定期にやって来る。

2009 年 7 月 24 日に E 家らの宿営地にナイマーの車がきた。トラックの荷台には車の部品、座席には食料品が積まれており、その日はヒツジの毛皮を 1,500₮/kg で買い取っていた。M は 1,200₮ の小麦菓子を 2 袋、ウエハウス（400₮）、クッキー（800₮）、砂糖 1kg（1,500₮）、マッチ（40₮×10）、計 5,500₮ を現金で購入した。

2009 年 8 月 22 日に最寄りの CA 家の宿営地にナイマーのワゴン車がきた際には、M は次男を連れて歩いて CA 家まで出かけた。衣類を中心にツェツェルレグの市場と同じかそれより少し高い値段で売られていた。商品の値段を聞き取ったものが表 3 である。筆者が確認したところ全て中国製品であった。カッターシャツ、ブラウス、ズボン、タイツ、靴下、パンツ、ブラジャー、革靴、スニーカーのほか、学用品もあ

り、学校に通う子ども達が買いに来ていた。Mも長男のためにノート10冊と、Eの兄Hから預かっている甥っ子S（16歳）のためにズボン（3,000¥）を購入した。しめて5,000¥であった。

遊牧民の日常的な交通手段は、ウマ、バイク、車のいずれかであり、目的や移動人数に応じて使い分けている。家畜の放牧や他家の訪問などサント地域内を移動する際には、ウマかバイクが活用される。両親と子ども3人くらいまでならば一台で移動することができるため、最近ではどの世帯にも中型バイクが見られるようになった。トラックや自家用車を持っている家はまだ限られているため、車で移動が必要な場合は、乗り合いバスを利用するか、知人の車に便乗させてもらうことになる。乗り合いバスの料金は、サントーUB間が片道1万5,000～2万¥〔2009年9月時点〕、サントーツェツェルレグ間は片道7,000¥である〔2010年6月時点〕。

Mが長男をツェツェルレグ市に送って行く際には、知人の車に同乗させてもらっており、その時は片道7,000¥に値上がりする以前の5,000¥で清算した。親戚や知人に乗せてもらう方が乗り合いバスより安くなるのは確かであるが、車の持ち主に出かける予定がないと便乗も頼めないため、必要時に折よく調達できないという難点がある。

トラックやバイクを自家で所有している場合は、燃料代が出費となる。ホントンの中心地にあるガソリンスタンドでは1ℓあたり1,455¥であり〔2010年6月時点〕、UB（1,380¥/ℓ）に比べ割高になっている。携帯電話を利用していれば、ネグジ（*negj*）と呼ばれる通話料を入金するためのカード（および通話可能度数）をあらかじめ購入しておく必要がある。カードには500～1万5,000¥までの六つの価格帯が設定されており、ネグジ（通話可能度数）がなくなるとその都度カードを購入する。

ここまで、遊牧民が現金を介して市場やサービスにアクセスしている部分だけを提示してきた。しかし、個人間の交渉の余地がある場面においては物々交換による取引も行われている。ナイマーとの取引において、Mは飾りのついたハーフパンツを、エーズギー（低発酵凝固チーズ）12個と交換したと見せてくれた。Eは以前所有していたバ

イクを2007年に知人に75万₮で売却したと話す一方で、以前乗っていた白いトヨタ車は仔持ちのヤギ6頭と交換したという。このように交渉可能な個人間の取引においては、現金だけでなく家畜や乳製品による交換が行われており、その時々の手や自家の状況に応じて柔軟に交換方法を使い分けている様子が窺える。

### Ⅲ 市場を介さないモノの流通

E家の事例を参考に、遊牧民が生計を維持するために機会を捉えて市場へアクセスしている状況を見てきた。ところが、実際に彼らの生活の中に取り込まれているモノの来歴を聞き取ってみると、必ずしも市場を介して入手したモノとは限らないという実態が浮かび上がった。そこで、本節ではE家で行った聞き取り調査を基に、モノがいかなる方法で入手されているのかを示し、次節において消費の実態を探る手掛かりとしたい。

来歴の聞き取り調査と並行する形で、E家の許可を得て、2009年7月から2010年6月にかけて断続的に生活の中に取り込まれているモノの悉皆調査を行った。調査は食料品を除くすべてのモノを対象に、ゲル内、ゲルの周囲や家畜囲い周辺、およびE家の冬営地と夏営地の中間地点に設置されている固定式物置小屋で実施した。その結果、E家には1494点<sup>11)</sup>のモノが存在していた<sup>12)</sup>。

<sup>11)</sup> モノの総数に関しては以下の方針による。梁や組壁といったゲルの構造に関わるモノは、それぞれ一つのまとまりとする。76本ある梁も、5枚の組壁もそれぞれ一つとして数えている。また、大量の釘、洋ボタン、端布、金属部品などもひとまとまりとして数えた。ただし、収納場所が異なれば別に数えた。

<sup>12)</sup> 1967年に調査されたアフリカの狩猟採集民ブッシュマンは79品目で生活を営んでおり[Tanaka 1980: 39-44]、佐藤らが2002年に韓国ソウルで実施した5人家族の暮らすアパート(車内も含む)における悉皆調査の結果は、およそ10,000点であった[佐藤 2006: 38]。このように、生業や居住環境が異なればモノの在り方も異なるため、量的側面だけに着目した単純な比較は意味をもたない。本調査の目的は現代遊牧民の生活におけるモノの在り方を明らかにすることであり、その手掛かりとして導き出した1494点という数字は、全体と部分を相関的に捉えるための指標として用いる。

E家の住居（ゲル：ger）は結婚した二人の新居として2000年に建てられた5枚壁のもので、天窓の直径が1 m 50 cmと少し大きめである以外、ごく一般的なゲル構えである。遊牧という生業上、狩猟・牧畜関連用具<sup>13)</sup>が多数を占めるイメージがあるが、実際には100点に満たない。一方、E家には戸棚が二つ、長持は大小あわせて四つあり、その中には衣類、雑貨、道具類が収納されている。衣類だけでも244点、モノ全体の約16%を占めている。360点以上ある雑貨（約24%）には、歯ブラシ、化粧品、プラスチック袋、マッチ、トイレトペーパーなどの消耗品の他、梁飾りや置物といった装飾に特化したモノも含まれる。その他にも、洗濯板、双眼鏡、ナイフ、懐中電灯、斧といった身の回りの道具類、台所用具、書類や写真、学用品、儀礼用具・仏具、装身具などが収納されている<sup>14)</sup>。さらに、ゲルの外にはソーラーパネル、バイク、小型ゲル、物置小屋などが存在し、物置小屋の中には使用していない家財道具が保管されている。

このように、現代の遊牧民の生活には多くの衣類や雑貨が、中には一年に一度も使われないまま取り込まれているのが実情である。基本的に移動の妨げにならない程度という制約は存在するものの、トラックの普及による運搬規模の拡大と固定式物置小屋の増設によってその制約は緩和傾向にあると考えられる。

1494点のモノの中からE家の人々に「それはどうしたのか」と尋ね、来歴が特定された540点について入手経緯で分類したところ、(1)購入・交換、(2)贈与・譲与、(3)作製・転用、(4)借用・混入、(5)拾得・収獲

<sup>13)</sup> 猟銃、銃スタンド、銃弾、差し油、目出し帽、鞍、鞭、おもがい、はみ、端綱、仔ウマつなぎ用ロープ、ウマ留め、ウマとり竿、家畜囲い、糞泥運搬用桶、糞泥掻きシャベル、飼料桶、バケツ、馬乳酒発酵容器、注射器、浣腸器、薬液など。

<sup>14)</sup> 書類とは家畜健康手帳や身分証、処方箋などを指す。儀礼用具・仏具とは、ハダグ（qadag）と呼ばれる絹布や初物を天に捧げるための木杓ツァツァル（tsatsal）、仏壇に安置された仏画、マニ車、香炉、燈明台、燈明台の芯にするための綿などのことである。装身具には、帽子、カバン、指輪やピアスなどのアクセサリー類、眼鏡やサングラス、嗅ぎ煙草、ベルト、履物など衣類以外で身につけるモノが該当する。

のいずれかとなった。

### (1) 購入・交換

市場や商店、職人や友人・知人との間において、現金もしくは家畜や畜産品など何らかの代価を支払って入手したモノがこれに該当する。購入・交換されたモノを見てみると、マッチ、トイレットペーパー、歯磨き粉などの消耗品、ノートや筆記用具などの学用品、洋服や下着などの衣料品、帽子、アクセサリー、ブーツなどの装身具、デールの生地、ボタン、ほうきなどの雑貨、あるいはゲルの組壁、天窓、扉、かまど、家具や仏具、車、バイク、電化製品、猟銃、銃弾など、自作できないモノであった。

来歴の聞き取りを行った 540 点中、購入・交換によって入手されたモノは 163 点で、全体の 30.2% を占めた（図 3）。ただし、これは生活財に限った場合である。悉皆調査の対象に含まれていない小麦粉、砂糖、リンゴ、ジャガイモなどの食料品やアメ、チョコ、ビスケットなどの菓子類は、ほぼ購入・交換によって入手されていた。

### (2) 贈与・譲与

贈与・譲与に該当するのは、親戚・友人・知人から代価の授受を伴わずに入手したモノである。やり取りが行われた場面と受けとったモノによって贈与は二種類に分けられる。一つは、結婚や年中行事における親戚訪問など特別な機会に行われる贈与である。E 家では、結婚の際に親から継承した銀杯や仏具、親戚から贈られた食器棚、調理器具、絨毯、ミシン、寝具、デールなどが現在でも活用されており、新学期になると、子ども達は親戚から贈られた学用品を持って登校する。また、友情の記念や何らかの事物に対する返礼として友人・知人から贈られた懐中電灯やガス灯、帽子、キーホルダー、バイク、ナイフなども大切に使われている。もう一つの贈与は、親戚や親しい世帯による古着や不用品の提供である。E 家では、親が使っていたナイフ、木皿、柄杓、フライ返し、アルミ容器、小麦粉貯蔵容器などを修繕しながら使っている。親戚

間では、余分にある、サイズが合わないなどの理由で中古の蓄電器、大型ポリ容器、トランク、ボストンバッグ、アクセサリ、子どもの衣類、玩具、学用品、履物のお下がりなどが贈与される。

他方、譲与としたのは、交渉を持ちかけることによって相手から無償で譲り受けたモノである。E家では、家畜の飼料桶を作るための古タイヤや壁に掛けるビニールシート、ソーラーパネル、掛布団、石鯨、乾電池、Tシャツ、ズボン、望遠鏡、葉などを地元の知人や都市部の親戚、時には筆者といった社会関係を活用して入手していた。このような贈与や譲与の対象には原初的に市場から得たモノだけでなく、製作や収獲によるモノも含まれる。贈与・譲与が全体に占める割合は27.6% (149点)であった。

### (3) 作製・転用

作製というのは、山から伐り出した木材や、建物・機械・既製品などの廃材・部品、家畜の毛皮や革、骨、腱など生活の中にあるモノで作られたモノである。ゲルの梁や床板、家畜囲いや家畜関連用具、あるいは包丁、燭台、麺棒、板盆、火バサミ（ハサミ型の火箸）、塵取り、敷布団などの生活用具、デール、子どものズボン、履物などが自家で製作された。

また、何らかの方法で入手した後、本来の目的に使用できなくなったモノを加工したり、別の用途に使用している場合を転用とした。例えば、5,000円でナイマーから購入したポリバケツが部分的に破損したため、上部を切り取ってその縁をビニールテープで覆って割れを防ぎタライとして利用している場合などである(2009年8月23日、M;聞き取り年月日、話し手)。作製・転用が占める割合は24.8% (134点)であった。

### (4) 借用・混入

借用・混入に該当するのは、調査時点でE家にあったが、他家の所有であるモノである。例えば、糞泥運搬用桶と櫓、シャベル、ハサミ、麺棒、鍋、保温瓶、板盆、ボウル、蒸留器、教科書、ビニール製の長靴



などE家が他家から借用したモノや、獵銃、蓄電器、糸など他家から一時預かりを頼まれたモノ、または器、帽子、デールなど来訪者が置き忘れたモノである。文化的なタブーがあるモノを除いて<sup>15)</sup>、何からの理由で混入したモノも利用することができる。借用・混入は全体の12.6% (68点) を占めた。

#### (5) 拾得・収獲

拾得というのは地面に落ちていたモノを見つけて自分のものにするものである。路地や草原に落ちているモノ、廃棄されたモノは基本的に見つけて拾った人の所有物となる。ナイフや帽子のように慣習的に拾ってはならないとされているモノもあるが、現金や携帯電話などの拾得物は実際に見つけた人の所有物として扱われている。

収獲したモノとしては、山から伐り出す薪材、自家の家畜の毛、骨、腱、毛皮、狩猟で仕留めた野生動物の角や毛皮、松脂（ガムのように噛む嗜好品）、薬草などがある。拾得・収獲によって得たモノの割合は4.8% (26点) であった。

来歴を聞き取った540点の事例から明らかになったのは、遊牧民が市場との直接交換（購入・交換）によって入手している生活財は3割に過ぎず、7割はそれ以外の方法によっているという事実である。上述した入手方法の内、自家調達が可能な作製・転用、拾得・収獲を除くと、生活財の4割相当が、親戚・友人・知人といった社会関係を基盤とする贈与・譲与 (27.6%) と借用・混入 (12.6%) によって流通していることになる。

### IV 世帯を越えた消費

悉皆調査と来歴の聞き取りによって、モノが遊牧民世帯に取り込まれる経路が判明したところで、次に、それらのモノがどのように消費され

<sup>15)</sup> 他人の帽子やベルトの装着は、運氣が乱れる、あるいは運命が変わるとして敬遠される。

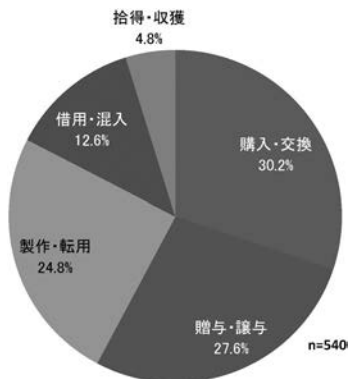


図3 生活財の入手方法

ているのかを探っていきたい。第Ⅲ節で明らかにした通り、E家には借用・混入という形で他家の所有物が混在していた。12.6%と全体に占める割合こそ小さかったものの、それは定点調査の限界に由来するものであり、他家のモノが世帯を越えて使用されているという実態は注目に値する。そもそも、悉皆調査によって記録されるモノというのは、その時点において存在したストックに限定され、連続的な時間の流れの中で生起するモノの動態（フロー）を捉えることはできない。E家では、毎日何らかのモノが共営世帯<sup>16)</sup>や親戚世帯との間でやり取りされており、時々刻々と状況が変化していた。しかも、自家と他家の所有物の扱いに違いが認められないため、他家から戻って来たのか、他家から借りて来たのか見ただけでは判断がつかなかった。

例えば、Mがたわしで家族の靴を洗っていたので、そのたわしはどうしたのかと尋ねたことがあった。すると、「二年前にナイマーから500円で買ったのよ。買った時はたわしの背の部分に手を通す輪っかがついていたの〔今は取れて無いけどね〕」と木製の部分を指で示しながら答えた（2009年8月28日）。すっかりE家のモノだと思い話をきい

<sup>16)</sup> 共に宿営する世帯であり、家畜の放牧、搾乳、毛刈り、家畜囲いの清掃などさまざまな作業を協力して行う。季節移動の度に組み替えが行われるが、一般的に親戚・姻戚関係がある世帯との共営が多い〔日野 2001〕。

ていたが、よくよく確認したところ共営世帯 G 家のモノであることが判明した。このような状況を踏まえたうえで、実生活に即したモノの動きを観察し、消費の実態を明らかにした。

2012 年の 7 月 29 日から 8 月 6 日までの九日間に、E 家が他家との間で行ったモノの貸借を記録し、その結果を示したものが表 4 である。九日間で計 63 件の貸借（失敗含む）があり、そのうち E 家（筆者含む）の貸与が 39 件、借用が 24 件であった。対象となったモノをみると、ハサミ、懐中電灯、斧、ミシン、火バサミ、タライなどの道具類、保温瓶、蒸留器、茶碗などの台所用具、糸、石鹸、髭剃り、耳かき、セロハンテープなどの雑貨、机、長椅子などの家具のほか、衣類、履物、家畜関連用具であり、遊牧生活に欠かせないモノが多岐にわたって貸借されていることがわかる。ハサミ、火バサミ、ミシンのように同じモノが一日に何度も世帯間を往来している様子や、ハサミのように E 家で所有しているにも関わらず X 家や筆者から借用している状況も見とれる。

貸借の相手は、E の実兄でありこの夏の共営世帯である B 家を中心であった。元来広大な土地で分散独居する遊牧民にとって共営世帯というのは家畜の協同管理以外に、モノを融通し合う最も身近な相手として認識されている<sup>17)</sup>。E 家からの貸与 39 件中、23 件は B 家に対するものであり、E 家が借用した 24 件中、12 件は B 家からの借用であった。その他、たまたま近くに宿営地を設けていた（便宜上、準共営世帯としている）X 家、J 家や、友人、知人との間でも貸借が行われており、筆者も例外ではなかった。

他家のモノを借用する感覚について E は次のように語った。「冬営地では各世帯が離れて宿営するから簡単にモノを借りに行けなくなる。〔この夏営地のように〕世帯が多いとモノを取りに来る人が増える。た

<sup>17)</sup> 物理的な近さを反映して共営世帯に期待される役割が次のような E の語りにも現れている。E 家には首都に住む知人から譲り受けた双眼鏡があった。それを E が右と左のレンズに分割して望遠鏡にし、一つを親戚の R（M の姉婿）にあげた。R のもっていた望遠鏡が雨に濡れて見えなくなったからだという。「R に頼まれたわけじゃないけど、春営地では R 家が一世帯だけで宿営していたので、すぐに借りられる相手がなくて不便だと思ったからあげた」（2010 年 7 月 31 日）。

表 4 E 家の貸借記録

日付	対象	貸し手	借り手	日付	対象	貸し手	借り手
7/29	ハサミ	E 家	B 家	8/3	髭剃り	E 家	B 家
	糸	E 家	B 家		斧	E 家	X 家※
	ハサミ	E 家	B 家		ハサミ	X 家※	E 家(失敗)
	懐中電灯	筆者	E 家		机	B 家	E 家(失敗)
7/30	保温瓶	B 家	E 家	8/4	珪銃スタンド	E 家	JN*(失敗)
	デール(着物)	E 家	G 家*		糞泥用シャベル	X 家※	E 家(失敗)
7/31	ブリキ桶	B 家	E 家		糞泥用シャベル	X 家※	E 家
	斧	E 家	B 家		火バサミ	E 家	B 家
	ハサミ	E 家	B 家		腰掛	E 家	B 家
	石鹸	E 家	B 家	8/5	机	B 家	E 家
	蒸留器	J 家※	E 家		カミソリ刃	E 家	X 家※
	吊るし鍋	X 家※	E 家		金たわし	E 家	B 家
	机	GD 家*	E 家		珪銃スタンド	E 家	JN *
8/1	腰掛	B 家	E 家		ネグチ	G 家*	E 家
	斧	E 家	B 家		電話	OL 家*	E 家
	火バサミ	E 家	B 家	8/6	鋸	E 家	B 家
	長椅子	B 家	E 家		ハサミ	筆者	E 家
	汚水用容器	B 家	E 家		耳かき	E 家(筆者)	X 家※
	デール関連品	E 家	J 家※(失敗)		調味料	E 家	X 家※
	火バサミ	E 家	B 家		木椀	E 家	B 家
8/2	ハサミ	E 家	B 家		ナイフ	E 家(筆者)	X 家※
	絆創膏	E 家(筆者)	X 家※		斧	E 家	X 家※
	ガーゼ	E 家(筆者)	X 家※		机	B 家	E 家
	容器	E 家	X 家※	8/6	セロハンテープ	X 家※	E 家
	敷布団	B 家	E 家		懐中電灯	筆者	E 家
	茶碗	B 家	E 家		懐中電灯	E 家(筆者)	X 家※
	プラスチック袋	E 家	X 家※		火バサミ	E 家	B 家
	口の小さい容器	E 家	J 家※(失敗)		雨用長靴	E 家	B 家
	ハサミ	B 家	E 家		ほうき	E 家	B 家
	机	B 家	E 家	※準共営 *友人・知人			
	ミシン	E 家	B 家				
	斧	E 家	B 家				
	ミシン	E 家	B 家				
	のみ	E 家	B 家(失敗)				

たとえば、「誰かの家の」柄杓の中に何か入っていると、『E 家の柄杓はきれいだったな、それを使おう』ということになる」(2012 年 8 月 4 日)。つまり、自家の柄杓を使用中さらに柄杓が入用になった時、中に入っていたものを移し替えて柄杓を洗って使うよりも、他家の柄杓を借りてきた方が「手っ取り早い」と考えるというのである。では具体的に、どのように貸借が行われているのかを事例でみてみたい。

## 【事例 1】

E 家で蒸留酒を作ることになり、M が器具を借りるために準共営世帯 J 家へ出かけた。お茶を振る舞われたあとと器具の一部であるブルフル（*bürkhüül*：鍋を覆う筒状器具）を借りて J 家をあとにし、今度は蒸留器の内部に吊り下げる容器を借りるために準共営世帯 X 家へ向かった。丁度家畜の所へ行こうとしていた X 家の夫人に声をかけると、夫人がゲルに引き返してきた。ゲルから出てきた X 家の息子は、J 家から借りてきたばかりのブルフルを見て、「なんて小さいブルフルだ」という。夫人も「いつ蒸留するの？明日？なら、明日の朝うちのを借りて行ったらいいじゃないの」といいながら吊り容器を貸してくれた（2012 年 7 月 31 日）。

## 【事例 2】

M が親戚に頼まれたデールを作っており、ミシンを使う段階になったのでミシンをのせる机を借りるために共営世帯 B 家を訪ねた。B 家の夫人は夕食の準備をしているところで、しばらくの間二人は雑談をしていた。そこへ準共営世帯 X 家の夫がやってきて、B 家の棚の上にあったハサミを手にとり出て行こうとした。そのハサミを見た M が、「そうそう、そのハサミ、私に貸して」と声をかけると、「うちも今、縫い物してるとこなんだ」と X 家の夫が振り向いて答えた。それを聞いて「それ、実際のところ誰のハサミなの？」と尋ねる M に、「うちの」と答えると、X 家の夫はハサミを持って出ていった。そのうち M は「出よう」と筆者を促すと、机の事は何もいわずに B 家を出た（2012 年 8 月 3 日）。

事例 1 は、E 家が恒常的に所有していないモノを他家から借用した事例である。一時的・恒常的に所有していないモノの必要が生じた際に、所有している人物のところへ出向いて利用を求めることが一般的に広く行われている。事例 1 では、蒸留酒作りに必要な器具の一部を、別の世帯から同時にそれぞれ借用しており、利用する側がいくつかの候補の中

から対象物や交渉相手を選好していることが窺える。事例2は、交渉が空振りに終わり機とハサミを借りられなかった例であるが、登場する三世帯を通して日常的な貸借の様相が示されている。まず、E家は諸事情によって機を一時的に所有していなかったため<sup>18)</sup>、Mが機を借りにB家を訪れた。B家はこの夏自家のハサミを何らかの事情で失っており、共営するE家から毎日のように借りていた。結婚式が集中するこの時期には、親戚に頼まれた晴れ着を作るため、どの家でもハサミの需要が高まっており、E家ばかりに頼めないB家は準共営世帯X家からハサミを借用していた。B家を訪れたMがこの時目にしたのはX家のハサミであった。切れ味の良さそうなハサミを見たMは借用を求めたが、X家でも晴れ着作りの最中でハサミが必要だったため、X家の夫によって回収された。

ここで提示されているのは、借用を求める動機は、モノの所有・所持如何に関わらないこと、貸借関係は複数世帯との間に同時並行的に成り立っていること、また、借用の際にはタイミングが重要であるということである。所有者と使用のタイミングが重なってしまった場合には、所有者が作業を終えるのを待って再度交渉する、別の世帯へ借りに行く、自家の作業日を変更するなど利用者が柔軟に調整を行うことでモノの利用を図っている。

他家のモノを利用する動機には、機能・性能が優れているという他にもさまざまな個人的理由があった。例えば、デザインが異なるからという理由によって他家の帽子を借用した事例である<sup>19)</sup>。実のところE家には、Eが結婚式や都市部に行く際に愛用しているラクダ色のテンガロン

<sup>18)</sup> E家がゲルを新調し家財道具を新たに調達することになった諸事情については、堀田（2015：116-117）を参照。

<sup>19)</sup> E家の長持の上に共営世帯B家の夫（Eの兄）のモノだという灰色のテンガロンハットが置かれていた。B家の夫がやって来たので帽子について尋ねると、「それはハレ用の帽子だ」と答え、自分の被っているつばの浅いハット帽を指さし、「これは雨用」という。前日Eがハラホリンに出かける際にB家の夫からハレ用の帽子を借りていったのだという。道中雪に降られた帽子は一晩たった今も濡れており、B家の夫は帽子を手にとり濡れているのを確認すると、再び長持の上に戻した（2010年6月7日）。

ハットがある。そのため、なぜわざわざB家のハットを借りたのかと筆者が問いかけると、「違う帽子が被りたかった」と答えたEに対し、側で話を聞いていたMはニヤッとしながら、「けちったのよ」と答えた。自分のハレ用帽子が傷まないように温存するために人のモノを借りたのだという。また、消耗品であるカミソリ刃を切らしているという理由で借用しにくる場合や、訪問先でたまたま目に付いたので、ついでに剃っていくという場合もあった<sup>20)</sup>。このように個々人の多様な動機を背景に日常的に世帯を越えたモノの利用が行なわれている。貸借という形でモノが世帯間を循環することによって、各世帯の必要が補完されているのである。

## V モノの循環を促す文化装置

ここまで、遊牧民による他家のモノの利用という実状をイメージしやすくするために貸借（貸与・借用）という表現を便宜的に用いてきたが、現地の文脈に即して理解する場合には注意が必要である。利用権の与奪である貸借と所有権の移譲である譲渡に対する姿勢を遊牧民自身があえて首尾一貫させていないためである。遊牧民が他家からモノを借用する際の常套句は「…あるか? (…*baina uu*?)」あるいは「…を取ろう (…*av'ya*)」である。これはモノの譲与を求める交渉の際にも使われており、実際に所有者からモノが手渡される場面においても、これが貸与か譲与かは言明されない。つまりその場で行われているのは「モノの融通」である。利用後自発的に返却するか所有者に返却を求められれば結果的に貸借となり、利用後返却しないままで所有者も返還を求めなければそのまま他家に置いておかれ、それが常態化すれば譲渡と追認される。たいていの場合、交渉において使用の目的や理由が告げられるため、所有者側は相手が貸与を求めているのか譲与を望んでいるのか判断

<sup>20)</sup> E家にやってきたEの友人GM（サントの遊牧民）が無言のまま、北東側の戸棚の上に置かれたEの髭剃りで髭をそり始める。掃き掃除をしていたMは特に何の反応も示さず床を掃いている（2010年6月6日）。

できる。しかし、遊牧民にとって重要なのは、必要な時に必要なモノが利用できるか否かであり、あえて貸与か譲与かを言明しないことでモノを融通しやすくしていると考えられる。求めてくる者があれば話を聞き、相手の必要性あるいは緊急性に応じてモノを融通することが望ましいとされる<sup>21)</sup>。

そのような社会において、モノ惜しみをすることは悪徳と見なされる。正当な理由もなくモノを融通しない者は「けち (*kharamch*)」と陰口をたたかれ、家の評判が悪くなる。では、他家の要求に応えられない時にはどうするかというと、所有者による説得が行われる。Eに、人がモノを取りに来た場合に断ることはできるのかと尋ねたところ、「必ずしも〔モノを〕渡さなくてもいい。相手による」と答えた。もし、渡したくなければ、「明日、遠出するので入用だ」などと理由をつけて断ることができるという(2010年6月5日)。ただし、その理由とは自然の影響によるものであったり、肉親の形見や友人からの贈り物など特別なモノだからといった、やむに已まれぬ事情でなければならない。所有者だからといって単に所有権の主張によって要求を退けることはできず、要求には応えたいが、自分にはどうすることもできないという状況を提示することで、相手を納得させることが必要になる。

このように、所有者の許可なしにモノを処分(貸与・譲渡・売却・廃棄)することができない、あるいは使用のタイミングが重なれば所有者が優先されるなど所有権を明確に認めつつも、道德観や占有に対する社会的圧力によってモノが融通されやすい環境がづくり出されているといえる。

---

<sup>21)</sup> 人がモノを求めてやって来る度にそれに応じているが、モノを惜しいと思うことはないのかという筆者の問いかけに対し、Eは「モノを惜しいと思ってはいけない」と答えた後、「思う人もいれば、思わない人もいる」、「例えば、ガソリンがないから5ℓくれ、と人が言ってきたら、何かあったんだろう、困っているならあげようと思って〔自分なら〕あげる」と語った(2012年8月4日)。



## VI 消費の最終形態

モノの来歴において、生活財の4割相当が親戚・友人・知人といった社会関係を基盤とする贈与・譲与と借用・混入によって流通していることを述べたが、実際の生活においても、利用を求める者が所有者の下へ出向き、交渉によってモノの利用権（貸借）あるいは所有権（譲渡）を獲得するという形で「モノの融通」が実践されていることが明らかになった。モノの融通とは、現物が利用者の手に渡り使用されるということであり、まさに消費にあたる。つまり、遊牧社会においては、モノは世帯を越えて移動（流通）しながら消費されているのである。

世帯を越えた消費が行われているとはいえ、貸与、譲渡、売却、廃棄については処分権の範疇であり、所有者にしか認められていない。しかし、貸与によって所有者の手元から離れたモノには、弁済の不履行（持ち逃げ）<sup>22)</sup>、原状回復不可能な改変（破損、すり替え）<sup>23)</sup>などのリスクが伴うことになる。通念的には借用中に過失や故意によって紛失、損壊した場合には、同等のモノで弁償しなければならないとされている。だが、実際に弁償するかどうかは当事者に委ねられている。Eが要求を断る際に「相手による」と答えた背景にはこのような事情がある。

貸与のリスク以外にも所有者の意図しないモノの移動として遺失と盗難がある。家事や放牧の合間に他家を訪問することが遊牧民の日課の一つであるが、特に男性の場合飲酒の機会が多くなるため、訪問先に帽子

<sup>22)</sup> 昨年の秋にEの遠縁にあたるOが深夜に、車が動かなくなったから灯りを貸してくれと言ってきたので、E家にあった手巻き充電式の懐中電灯を貸した。その後「返せ」といったがそのまま戻ってこないという（2012年7月29日）。

<sup>23)</sup> E家が親戚R家に貸与していた60ℓのポリタンクが戻ってきた。タンクを調べてみると、蓋とタンクを固定する金具が別のものにすり替えられていることがわかった。Eが「金具は？」と尋ねたが「知らん」と相手は答えた。親戚が帰ったあとEは「締まり具合の良い固定具だったからすり替えられたな」と不満を口にしていた。それから、「こうしておかないと危険なんだ」と言いながらタンクの腹と蓋と固定具に、ペンキで自分の名前のイニシャルを書き付けた。作業を終えると満足げに「これでもうすり替えられない」と語った（2009年9月7日）。

や携帯品を忘れたり、道中に落として来たりすることがよくある。発見した人が取り置いてくれたり、家に届けてくれたりすることもあるが、手元に戻らないことも多い。また、モノが盗難に遭うこともある。E家では、家具の上に置いていた双眼鏡が、B家では春営地に置いてあった床板が盗まれるという出来事があった。人の出入りが多いため、誰がいつ盗んだかを特定することは困難である。

他方で、使用に耐え汚れや傷みがひどくなったモノ、いらなくなったモノは即座に廃棄の対象となる。モノの新旧によらず所有者が不要と判断したモノは焼却処分され、生活世界から排除される。廃棄が決まったモノはゲルの入口付近に人目に触れない状態で留めて置かれ、ある程度の量になるとまとめて外の糞泥置場で焼却される。タイヤ、鉄くず、陶器片、時計、保温瓶、靴などを一緒に燃やす。焼却処分にする目的は、モノの移動を完全に止めるためである。事例3に挙げたように、所有者が廃棄を決定したモノであっても、要求者が現われれば再び流通・消費の循環に取り込まれてしまう。また、廃棄のつもりで外に放っていただけでは、誰かが拾って加工し使用することもある。そのため、個人的なモノや他家による再利用を好まないモノについては、焼却による不可逆排除を行うのである。

### 【事例3】

Mがトランクから子ども達の衣類や端布を取り出していたので、どうするか尋ねると、傷んだので焼き捨てるという。ダルハン市に住む親戚から送られてきたボストンバッグの中からも、要るモノだけを取り、残りの古着や端布は焼却処分しようと選別していた。そこへ共営世帯G家の夫人がやって来た。床に置かれた布の山を捨てようとしているのを知ると、「こんな新品の布、捨ててどうするの?！」と言って使えそうなきれいな布を数点抜き取り、それらをMが端布をいれて燃やそうとしていた透明のプラスチック袋に入れた。「こんないい布捨てるなんて!若い人はモノの価値がわからないのかしらね」などとG家夫人がぶつぶついいながら布を取っているのを、Mは微

妙な表情で見ながら、「別に、使わないし…」と小さな声で反論した（2009年8月30日）。

## Ⅶ 考察と結び

本稿では、遊牧志向型遊牧民の日常生活におけるモノの動きに着目し、その生存戦略をみてきた。彼らは家畜を自家消費に回し、カシミヤ、毛皮、乳製品の販売、およびサマルなどの収獲物の販売によって生計を立てている。また、他家に便乗したり畜産品の販売や生活財の購入を委託したりすることで市場へ出向く機会を集約し、アクセス経費の縮小を図っている。このように食料品や生活財の需要を満たすための市場の利用がみられる一方で、市場との直接交換を経ずに流通し消費されているモノの実態が浮かび上がった。親戚や共営世帯間における生活財の融通がそれである。モノに対する所有権を認めつつも、社会関係を活用した交渉によって占有権を制限し合うことで、モノの移動と消費を図っている。このようなモノの融通による流通・消費システムが市場経済に対する緩衝装置としての機能を果たしていると考えられる。急激な生活の変化や世帯間の格差を吸収し、市場でモノを獲得した世帯から他の世帯へとモノの再分配が図られていく構図である。モノを所有しなくとも利用できるという文化・社会的環境が遊牧志向型の生存戦略を可能にしているのである。

ただし、この戦略を支えるためには、消費の最終形態のところでも触れたが、モノを利用の循環の中に取り込もうとする社会的圧力が非常に強く働くことになる。貸与を拒否するための所有者による説得や、焼却によるモノの強制排除が必要となるところからもその圧力が窺い知れる。そのような遊牧生活において、占有権の主張による移動の制限がどのように受け止められるのかを示す事例を最後にあげる。

親戚であるC家一家がE家を訪ねてきた折、C家からヨーグルトのお裾わけを受けることになった。Mから二つの茶碗を託されたC家の娘が自宅へ向かって駆け出したところに、E家の次男U（6歳）が出く

わした。UはC家の娘が手にしている茶碗を見とがめると、「人の家のモノを取っていくな!」と大声で叫びながら追いかけて行き、しばらくして「茶碗が取られた。返せって言っても返さない!」とべそをかきながら戻ってきた。それを呆れながら聞いていたC家夫人は「市場経済(zakh zeel)の申し子ね」といって笑い、「怖がりなさんな。モノを取りに行っただけよ」となぐさめたのである(2010年6月4日)。

ここから読み取れるのは、市場経済が「排他的な使用権(占有権)」を意味し、社会関係を無視して発動されることで融通原理を脅かしかねないと捉えられていることである。部分的に市場との直接交換を利用する彼らは、市場における交換原理と日常生活における融通原理を相手や状況に応じて使い分けている。親戚や共営世帯という社会関係にあれば入手方法の如何によらず、交渉によってモノの融通を受けることが期待できる。そのような融通原理で展開している場面において、モノのフローを堰き止めるようなUの言動は「市場経済」、つまり逸脱と見なされたのである。

## 付記

本稿は2015年に総合研究大学院大学文化科学研究科へ提出した博士論文「モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌」の一部および既発表論文「モノに執着しないという幻想—モンゴルの遊牧世界におけるモノをめぐる攻防」『総研大文化科学研究』第8号、117-135頁、2012年の一部に加筆修正を行ったものである。

## 参考文献

Baatarbileg Yo., Chadraa B. (eds.)

2009 *Arkhangai Aimag-Baigal', Tüükh, Soyol, Khümüüs*, Arkhangai.  
日野千草

2001 「モンゴル遊牧地域における宿营地集団—モンゴル国中央県ブレン郡における事例から」『リトルワールド研究報告』17: 89-125。

堀田あゆみ

2015 『モンゴル遊牧民エンフバト一家のモノ語り *Nomadic Life in Mongolia — Stories of Enkhbat Family and their Belongings*』株式会社テクネ。

辛嶋博善

- 2010 「取引費用の引き下げ方—モンゴル遊牧民と市場」中野麻衣子・深田淳太郎編『人＝間の人類学—内的な関心の発展と誤読』pp.191-209、はる書房。

風戸真理

- 2009 『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』世界思想社。

三秋尚

- 1995 『モンゴル遊牧の四季—ゴビ地方遊牧民の生活誌』鉅脈社。

森真一、ガントゥムル・B

- 2002 「Ⅱ部 遊牧の市場経済化への試み／第3章 食肉流通革命・計画編」小長谷有紀編著『遊牧がモンゴル経済を変える日』pp.67-91、出版文化社。

National Statistical Office of Mongolia

- 2011 *Mongolian Statistical Yearbook 2010*, Ulaanbaatar.

ロッサビ・モリス

- 2007(2005) 『現代モンゴル—迷走するグローバリゼーション』小林志保訳、小長谷有紀監訳、明石書店。

佐々木史郎

- 1998 「ポスト・ソ連時代におけるシベリア先住民の狩猟」『民族学研究』63(1): 3-18。

佐藤浩司

- 2006 「暮らしを支えるゴミの目立て」『繊維製品リサイクルモデル研究会公開研究報告書』pp. 37-43、Rifmo 研究会。

Tanaka Jiro

- 1980 *SAN, Hunter-Gatherers of the Kalahari-A Study in Ecological Anthropology*, University of Tokyo press.

津江篤典

- 2013 「資源収入再配分の一例—モンゴル人間開発基金」『龍谷大学大学院経済研究』13: 3-4。

